早稲田大学大学院日本語教育研究科

２０２４年２月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：中国人学習者の日本語破裂音の自己調整学習
—知覚・生成能力と学習意識・行動を中心に—

申請者氏名：胡　偉

主査　蒲谷　宏　　署名　　印
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

副査　福島　青史　　署名　　印
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

副査　木下 直子　　署名　　印
（日本語教育研究センター准教授/日本語教育学）

＜本論文の概要＞

本博士学位申請論文の章立て、および各章の概要は、次のとおりである。

第１章 序論：本研究は、構成主義に基づき、自己調整学習の観点から学習者の視点を重視し、中国人学習者による日本語破裂音の習得をテーマとしたものである。また、有声・無声破裂音の知覚能力・生成能力という、客観的に表出され検定可能な学習成果についても解明するとともに、破裂音に関する学習意識およびその意識に基づいた行動という主観的に表出される学習過程についても探求する。それらを踏まえ、破裂音習得における能力面の学習成果と心理面の学習過程を関連付けて考察し、学習者を主体とした音声教育の改善と音声教育観の形成につながる提言を行う。

本研究の研究課題（RQ）は、以下のとおりである。

RQ1：破裂音の自己調整学習の学習成果は、知覚と生成にどのように現れているか。

RQ2：破裂音の自己調整学習の学習過程で、どのような知識が構成されているか。

RQ3：破裂音の自己調整学習の学習過程で、学習者がどのように取り組んでいるか。

RQ4：破裂音の研究から学習者主体の日本語教育にどのような示唆が与えられるか。

第２章 先行研究：本章では、日本語の破裂音に関する研究を、音声学研究、音声習得研究、音声教育研究の 3 つの分野に分けて整理する。具体的には、1. 音声学研究を、調音音声学、音響音声学、聴覚音声学に分け、2. 音声習得研究を、知覚能力、生成能力、意識・行動に分け、3. 音声教育研究を指導の理念、方法の視点から概観し、現在までの知見をまとめる。そして、先行研究の成果と本研究との関わりについて述べる。さらに、先行研究における問題点を指摘し、未解決の課題と「1.4 本研究の課題」との関連性を示す。

第３章 知覚調査：知覚能力における学習成果についての知覚調査は、有声・無声破裂音に関する学習者の知覚能力を測るために、1 年間にわたり 5 回行ったパネル調査である。

第４章 生成調査：生成能力における学習成果についての生成調査は、有声・無声破裂

音に関する学習者の生成能力を測るために、9 か月間にわたり 4 回行ったパネル調査である。

第 5 章 質問紙調査：自己調整学習の能動性とメタ言語的な理解についての質問紙調査は、破裂音の自己調整学習の過程で、学習者がどのように積極的・能動的に参与しているか（能動性）、破裂音をどのようにメタ言語的に理解しているか（メタ言語的な理解）を調べるために行った量的研究である。

第 6 章 インタビュー調査：自己調整学習過程の取り組みについてのインタビュー調査は、破裂音の自己調整学習の過程で、学習者がどのように積極的・能動的に参与しているか（能動性）、破裂音をどのようにメタ言語的に理解しているか（メタ言語的な理解）を調べるために行った質的研究である。

第 7 章 結論： 本研究では、自己調整学習の観点から、1 年間における、破裂音習得に対する学習者の能動的な参与について、能力面と心理面の両方から調査を実施した。本章では各調査の結果を総合的に考察し、研究課題の 4 つの RQ の回答を述べている。7.1～7.4 はそれぞれ、RQ1～RQ4 に対応する。

7.1 知覚・生成能力の獲得

7.2 学習過程における知識の構成

7.3 循環的段階の取り組み

7.4 学習者主体の日本語教育への示唆

＜本論文の評価＞

評価できる点

（1）日本語には破裂音が多く含まれている。そのため、中国人学習者の聴解力には破裂音の弁別が前提となっているとする研究もある。これまでに破裂音に関して数多くの習得研究が行われてきたにもかかわらず、教育現場に活かされているとは言い難い。その理由に、量的に習得過程を検討し、成果を共有するだけでは、日本語教育の

実践者に学習者の音声学習に対する思いが届きにくかったという影響もあるだろう。本研究では、インタビュー調査を行い、学習者の音声学習に対する思い、苦悩を記述しているが、「有声・無声音であれば、このように教えればよい」といったパターン化した情報を見直すきっかけとなるのは間違いない。そして、本研究を公表していくことは、学習者の実感として日本語教育の実践者に伝わることが予測され、結果的に破裂音の教育にとどまらず、音声教育に大きく貢献することが見込まれる。

（2）特に評価できる点は、日本語の破裂音の習得について知覚実験、生成調査を縦断的に行いつつ、自己調整学習という観点から、質問紙調査、インタビュー調査を組み合わせ、学習者の学びを多角的にかつ客観的に捉えて明らかにしようとした点である。音声を言語化することは母語であっても難しいという見方があるが、知覚実験、生成調査を重ねた上で語ってもらうという本研究のような研究デザインによって、学習者が日本語の破裂音に対して意識的になり、言語化することをサポートした形になっている。この研究の遂行自体がある種の「教育」であったように思われる。

（3）音声の知覚と生成を例に、学習者の内面にある、構成された知識が介在するという見方から、学習、教育の両面に新たな提言がされたこと。学習においては、構成的知識のあり方を示すことで自己調整が可能となり、教師がその知識生成に関わるという立場を示したことで、新しい教師の役割が示された。

（4）本研究では、音声学習・教育が題材となっているが、文法、語彙学習・教育などについても、学習者の中で参照点がないものをどのように習得し、教育するかについて示唆を与える汎用性の高いものである。

（5）音声的な分析のみならず、学習者や教師がとるべき行動についても、多くのアイデアが具体的に示されている。

（6）研究課題に対して、トライアンギュレーションにより、質的にも量的にも、複数の方法論で綿密な調査が行われ、丁寧な分析がされた。

（7）本論文は、「中国人学習者の日本語破裂音の自己調整学習」について、詳細な調査、分析を行い、具体的かつ実証的に「知覚・生成能力と学習意識・行動」を中心に明らかにしようとした点で、大変優れたものであると評価できる。

課題・問題点

一方で、以下の点は、今後の課題となるため、その点を見直し、研究を進めてほしい。

1．ガ行鼻濁音について触れられていない点

日本語のガ行には破裂音だけでなく、語中、語尾にはガ行鼻濁音になるという特徴がみられるが、その点が一切触れられていない。調査語の一定数にガ行が含まれており、ガ行鼻濁音の可能性が音声分析ソフトの図からも観察されるが、新たに「ピッチ曲線連続型」というカテゴリーが作られている。本研究では、気息の有無が弁別の手がかりとして多用されていると結論付けているが、このことからもガ行鼻濁音と破裂音では弁別に大きな影響を与えることが予測され、再確認が必要である。

2．知覚実験をする際の刺激語の適切性の判断基準

日本語母語話者の判断が分かれ、50％が「バック」、50％が「パック」と判断した音声に対して適切な刺激語であると判断している。この判断基準は研究課題に大きな影響を与えるため、再考が求められる。

3．知覚実験の欠損値の扱い

本研究の5回目の知覚実験では、73名中6名が参加しておらず、データが得られなかった。このデータについては、1回目から4回目までの平均値を補完することによって得点を示す方法をとり、その結果として5回目の正答率が大きく下がっており、解釈を困難にしている。量的に分析を行う場合には、このような欠損値の扱いによって、結果が大きく変わり、解釈が変わるので留意すべきである。少なくとも得られていないデータを作るのは、研究課題の解明に役立つものではない。

4．生成調査の結果の検討方法

本研究の生成調査では、学習者に調査語を読み上げてもらい、有声、無声別に音響

分析を行い、結果をまとめて VOT の結果を報告している。しかし、実際に生成された音声が有声であったのか、無声であったのかについて確認されていないため、VOT の計測値は説得力に欠ける。

5．自己調整学習の尺度の扱い

自己調整学習の尺度で上位グループ、下位グループを分けているが、本論文でも記載されているように、リカート尺度の選択基準は人によって異なり、その影響を最小限に抑えるために検証が必要だと述べられている。因子分析やクロンバックα係数では質問紙の妥当性は検討できるが、選択基準の影響を抑えるものではない。z-score に換算するなどの方法での検討が必要である。

6．破裂音自己調整学習尺度の因子別結果の扱い

破裂音自己調整学習尺度の結果について、初級、中級、上級のグループに分けて示し、日本語レベルが高いほど、自己調整学習の能動性が低下する傾向などを報告している。自己調整学習は、個別性が高いことが予想されるが、知覚実験や生成調査の結果とアンケート調査の結果、インタビューの結果の関連性をグループではなく、個別に分析することで、学習者の習得が詳細に記述できるのではないかと考える。

＜本論文の判定＞

上に述べたような問題点や、同モデルに従う教師養成や教授法開発など発展的な課題は残されているが、本論文における調査、それに基づく主張・提言は、日本語教育学において大変意義のあるものであり、博士（日本語教育学）の学位を授与するに値する論文であると認められる。

日本語教育研究科　博士学位申請論文修正リスト

博士学位申請論文題目	中国人学習者の日本語破裂音の自己調整学習 ―知覚・生成能力と学習意識・行動を中心に―
申請者	胡偉
修正リスト提出日	２０２４年２月２９日

ページ番号・行	修正前	修正後
p.21　12	果している	果たしている
p.52　3	先行母音/e/	先行母音/a/
p.55　8	圧倒的多い	圧倒的に多い
p.55　下 4	統計した	統計を示した
p.261　下 1	詳しくは 6.2 を参照	（詳しくは 6.2 を参照）
p.263　下 9	詳しくは 6.3 を参照	（詳しくは 6.3 を参照）
p.264　3	詳しくは 6.4 を参照	（詳しくは 6.4 を参照）
p.264　下 10	詳しくは 6.5 を参照	（詳しくは 6.5 を参照）
p.264　下 1	詳しくは 6.6 を参照	（詳しくは 6.6 を参照）